

太平洋文明と太平洋共同体序論

神
川
彦
松

目 次

- 一 緒 言
- 二 近代世界の三大革命
- 三 ヨーロッパ文化の世界支配と行詰り
- 四 わが国土の地政学的地位
- 五 わが民族のジェニーとエネルギー
- 六 日本文化史の大観
- 七 日本文化の特色——短所と長所
- 八 文化の運行は東より西へ
- 九 わが民族の文化的使命
- 一〇 わが民族活動の三方面 || 太平洋方面が天与の主方面
- 一一 世界は大西洋民主共同体とアジア共産共同体とに兩分
- 一二 太平洋共同体、太平洋文明の創設
- 一三 結 言

一 緒 言

世界史の観点から見ると第二〇世紀は「大革命の時代」である。この間に空前の二大世界戦争が戦われ、近代の第三回目の大革命が行なわれた。この二大戦争と一大革命によって、世界文化と世界政治は、史上空前の曲り角にさしかかった。来るべき第二十一世紀は、「太平洋文明」の時代となり、世界は「太平洋共同体」をめぐって回転する世界史上の新時代になろうとしている。

約一世紀前、世界の国際舞台に登場し、民族革命を成就し、ついで帝国主義発展を遂げたわが国は二〇世紀の前半に「大東亜共栄圏」の旗をかかげて、勇ましく世界政治革命の陣頭に立った。が「時」至らずして一敗地にまみれた。しかしやがて二一世紀の到来と共に、わが国家及び民族はその世界史的使命を遂行すべき「時」にまさに遭遇しようとしているのである。二千年間、太平洋の西北の一隅に蟄居して静かに準備を整えていたわが国とわが民族は、今やようやく民族本来のジェニーとエネルギーを発揮すべき「時」に際会しようとしているのだ。

わが明治時代が生んだ天才的文明批評家である高山樗牛は、今より八十六年前次のような予言的宣言をなしたのである。

知識は歴史の上に立ち、歴史は関連の上に基く。真に部分を悟了しようと欲する者は全体を洞察する明を要する。比較研究方法によって各国民族の特質を案定し、更に人類歴史の一部としてこれを達観するのだから、世界における一国の関係・意義

を明らかにするを得ないであろう。これは實に過去の歴史の鍵たるにとどまらず、よって以て国民未来の運命に向つて経緯の光明を放つことが出来るであらう。しからば即ちひとり学者の閑事業のみにはとどまらないのである。予輩はこのような方法を以て日本民族の歴史を研究する学者の出ることを切望するものである。これ即ち日本を中心とする世界歴史を書くことである。⁽¹⁾

今日までわれわれ日本の学者は、学者的良心を持ってこのような「日本を中心とする世界史」を書くことは出来なかつたのだ。今やようやくその「時期」が来ようとしているのである。来る二一世紀に「太平洋文明」の創造と「太平洋共同体」の建設という偉大なる世界史的事業を遂行すべき運命を担うわが国は今や改めて世界及び日本の歴史を顧み、日本国及び日本民族が世界史上いかにしてこういう運命に際会するようになったかを理解し、この世界史的使命の本質と意義を洞察しなければならないのである。

(1) 高山樗牛「日本民族の特性と文学美術」(明治二八年二月)

二 近代世界の三大革命

いうまでもなく、世界史上、近代の世界はヨーロッパ文化及び勢力の世界的膨張の時代であつた。しかし中世の終りにおいては、世界は明確に区別される三つの文化圏 *Kulturbereiche* に分かれていた。第一、東アジア文化圏、第二、西アジア文化圏、第三、ヨーロッパ文化圏である。これらの文化圏の要素や特色にはいろいろあつて簡単にいうことは出来ない。アーノルド・トインビーの言うように文明の基礎を宗教に求める見地からいうならば第一は、儒教的・

仏教的文化圏であり、第二は、回教的・ギリシャ正教的文化圏であり、第三は、ギリシャ的・キリスト教的文化圏であつたということが出来よう。この三つの文化圏は当時においては少なくとも対等の資格で対立し、並存していた。もとよりこの間において多少の交流や影響が相互に行なわれたことはいうまでもない。しかし、世界史的にむしろ先進者であり、積極的影響を他に与えたのは当時では西アジア文化圏並びに東アジア文化圏であつて、ヨーロッパ文化圏ではなかつたのだ。ところが近代世界の黎明と共に、ヨーロッパ世界が俄然として擡頭し、世界をリードすることになったのだ。この西欧世界の勃興の動因となつたものは、いうまでもなく、まず第一回の大革命であつたのである。一、ルネッサンス 二、レフォーメーション 三、産業革命 四、民族的政治的革命、これである。これら四大革命の原動力によつて近代西欧文化世界が打開され、俄然興隆して他の二大文化圏を圧倒するようになったのだ。近世初頭から西欧文明が先頭に立つて文化的・政治的・経済的・軍事的に世界を近代化していったのである。

近代における第二回目の大革命は、一八世紀末から一九世紀の中頃にかけて行なわれた大革命である。これは三世紀を隔てて前の四つの革命に継続したものと見られるものであつて、やはり四つの革命である。

一、知性革命

二、産業革命

三、立憲革命

四、民族革命である。これらの革命の原動力となつたものは、科学・テクノロジー及びマネージメントの進歩発展

である。これらの革命によつてまず西ヨーロッパが近代化し、次第にその影響を他の世界に及ぼすようになったのだ。

二〇世紀に入つて世界は空前の大革命の時期に直面した。この世紀は確かに世界史上空前の「大革命の世紀」である。アーノルド・トインビーはその大著「歴史の研究」の中で、二〇世紀を史上最大の「動乱の時代」Age of Troublesと呼んでゐる。そして一国社会主義の大革命家であるヨゼフ・スターリンもこの世紀を目して、空前の「革命時代」Age of Revolutionと呼んでゐることは世人の知るところだ。この世紀に入り第一次世界戦争、第二次世界戦争がたて続けに戦われ、サイエンス、テクノロジー、マネージメントが空前の大躍進を遂げて、世界は原子力時代、宇宙時代に突入した。この世紀が従前の諸世紀に比して、空前の大革命の時代となったことは、世人の一般に承認するところである。

第二次大戦後の今日、現に進行しつつある大革命は、見方によれば前二回の近代の大革命の継続である。一、思想的・イデオロギー的革命 二、経済的・テクノロジー的革命 三、政治的・領土的革命 四、軍事的・戦争的革命 これである。これらの革命は、この世紀の初めから起り、第一次、第二次世界大戦により、画時代的躍進をなし目下なお盛んに進展しつつあるものである。今日はまだ原子力革命時代の入口にあるものであつて、これが尚今後半世紀続くか、はた一世紀続くかは何人も予言し得ないのである。

この四大革命は目下並び進行しつつあつていずれが先、いずれが後と区別することは出来ない。しかし、その大革命の根本動力となっているものは、依然としてサイエンス、テクノロジー及びマネージメントの革命的進歩である。但し、これに伴つて、思想的、イデオロギー的革命が声高く唱えられ、全世界を自由・デモクラシーとマルクス・レ

ニン主義とのイデオロギー闘争のちまたに投げ去つたのである。

三 ヨーロッパ文化の世界支配と行詰り

そこで、この「ヨーロッパの優越の時代」では西欧はただに文化的・思想的・学問的に世界をリードしたにとどまらない。経済的にも政治的にも又、軍事・戦争的にも世界をリードして、全世界を「ヨーロッパのコロニー」としてしまつたのだ。あだかも古代において、ギリシヤが当時の世界即ち地中海世界をギリシヤのコロニー即ち「マグナ・グレシヤ」Magna Graecia としたように、近代では西ヨーロッパは自余の全世界を「グレイター・ユーロップ」Magna Europa と化したことは史家の一般に説く通りである。近代の世界では、あらゆる方面で全世界は、ヨーロッパの一角に塗りつぶされてしまつた。どんな方面でもいやしくもヨーロッパ的でなければ一切近代的ではなく、また文明的ではないと評価されたのである。そしてヨーロッパ文明の基礎は知性的・合理的・科学的・テクノロジー的文化にであつたから、こういうような文化でなければ文化ではないと考えられるようになったのも不可避の現象であつたのである。

普通にヨーロッパ文化の源泉は一、ユダヤ的・キリスト教的思想 二、ギリシヤ的文化 三、ローマ的文化 四、ゲルマン的エネルギーであるとせられる。宗教的、神学的、哲学的、科学的、技術的にヨーロッパ文化がこれら初の三つに淵源することは明瞭である。これらは西洋で普通にクラシックと呼ばれるものであることはいうまでもない。

西洋文化の近代期に当るヨーロッパの近代文化が右の西洋文化の継続であることは当然である。即ちそれは、ユダヤ・キリスト教文化、ギリシャ文化、ローマ文化並びに中世文化の継続であり、発展であることはいうまでもない。まず西洋文化、西洋思想の中核をなすものは何かというと、第一は個人主義の思想・信仰である。第二は、法律的・権利的思想である。第三は、科学的・技術的思想である。そして、西洋文化の古今を通じて一貫する核心は、個人主義的、個性絶対主義的思想である。西洋思想の根底が結局、絶対個人主義的思想であり、絶対自由主義的思想であり、これから、あらゆる西欧的思想文化が流出・発展したことは、西洋思想史の物語るところである。あるいは、唯心論、観念論と言ひ、あるいは唯物論、実証論と言つても、またあるいは、個人本位思想、団体本意思想、社会本意思想というても西洋思想は、要するにすべて個人主義に基礎している点で一貫しているのである。結局、西洋における古来の政治思想を大観しても、結局それは、個性主義に基礎するものであつて、真に共同体主義ないし連帯主義に基礎するものではないといつて誤りではないのである。

今、試みに、西洋政治思想史を大観してみると、普通には、個人主義学説、国家主義学説、団体主義学説に分けて解説されている。個人主義学説では、自由主義、民主主義、無政府主義などが取り扱われる。国家主義学説では、哲学的国家観、法律学的国家論、科学的国家観などの各種が取り上げられる。また団体主義学説では、ユートピア社会主義、社会政策、サンディカリズム、ギルド社会主義、キリスト教的社会主義、マルクス主義、レーニン主義、ネオ・マルクス主義などが説かれている。しかし、これらのいわゆる国家主義学説、団体主義学説というものも、果して、ほんとうに個人主義と全く絶縁した真の団体主義の上に立っているかどうかは、大いなる問題である。総じて、西洋

思想は、上述したように、徹底的個人主義に根拠しているから、果してほんとうの連帯主義、ほんとうの団体主義を建設し得るやは、大いなる疑問である。また、西洋思想は個人主義の上に立ち、生存闘争を当然とする思想に基づくから、それが法律的・権利的思想を尊重することになるのは当然である。

ところが第一次世界大戦を契機として、さしも全盛を誇った西洋文明も行き詰り、「西洋世界の没落」を叫ぶ人士がようやく出現してきたのだ。ドイツの哲学者・文明批評家であるオスワルト・シュペングラーは、かの有名な「西洋の没落」*Der Untergang des Abendlandes*, 1918-22 を発表して、西洋文化がその繁栄期をすでに過ぎて、没落期に入っていることを指摘した。そして西洋文化に代って出現すべき新文化は、日本を指導者とするアジア文化であるとうと予言したのである。彼は凡そ、一国一民族の文明というものは、一切の生物と同じように、発育期、成長期、最盛期、老衰期、死滅期があることを、古今の文明について比較論証した。彼の文明評論は、極めてすぐれたもので、画期的な影響を世界的思想界に及ぼしたものである。

シュペングラーの示唆に従って、世界文明史論を著わし、シュペングラーの上に立たるといわれる者は、イギリスのアーノルド・トインビーである。彼はその畢世の名著「歴史の研究」*A Study of History*, 10 Vols 1934-54. において、古今東西の諸国・諸民族の歴史を研究し、あらゆる世界の文明の種類を検討し、すでに過去のものとなった二十の文明と、まだ現に存在し、または将来性を持つ五つの文明とを分かち、遠大なる哲学的眼光を以て、人類文明の将来を予言したのである。彼も近代のヨーロッパ文明が、すでに最盛期を過ぎ、衰亡期に入っていることを認める。ヨーロッパ文明に代って、勃興してくる文明には、西アジアの回教文明、南アジアの印度文明、並びに東亜の中国・

日本文明であらうと予想している。

「アフリカの聖者」として、世界的にあげられるアルベルト・シュヴァイツァーは「西洋文化の破壊と再建」Verfall und Wiederaufbau der Kultur 1923 および「文化と倫理」Kultur u. Ethik 1923 の中で、西洋文化がすでに破壊され、没落の運命にあることを説き、人類文化の再建を目指して人類が欲求、精進すべきことを説いた。彼は「生命への畏敬」Ehrfurcht vor dem Leben の根本信條を普遍的倫理の基礎とし、キリスト教を復活再生せしめ、人類の倫理の規範に準拠して、人類の新文化、新秩序を建設すべきであると説いた。

古く日本に滞在し、日本古典、日本文化の源流を究め、これを西洋世界に紹介したかの王堂チェンバレンは、夙に西洋文明の没落を予感し、これに代って世界を支配するものは日本・中国を指導者とするアジア文明であらうと述懐した。古代ローマに代って世界を支配するようになったのは、ローマ世界の辺疆に蟠居したゲルマン蛮族であったように、今后ヨーロッパに代って世界を支配する運命を持っている者は、ヨーロッパの境上に蟠居しているアジア人だらうと予想したのである。(Basil Hall Chamberlain, *Encore est vive la Souris*, 1933 参照)

クウデンホーフ・カレルギ伯はオーストリア・ハンガリー人と日本人の混血児である関係もあるが、独特の文明批評眼を持つことで世界に知られている。彼はその浩瀚な著述の中で、ヨーロッパ文明とアジア特に日本文明とを比較評論しているが、彼は一方でヨーロッパ文化が従前の世界史上のあらゆる文化の総合的複合体であることを認めると同時に、他方では、それが来るべき文化形態との間の過渡的存在にすぎないことを予言している。彼は将来の文化形体は、日本の固有文化を基礎として世界文化にまで発展せしめられたものであらうと想像している。(Coudé-

nhove-Kalergi, Praktischer Idealismus, 1925; Gebote des Lebens, 1931; Los von Materialismus, 1932; Totaler Staat-Totaler Mensch, 1936; Europas Weltendung 等参照)

上に挙げたように、ヨーロッパの文明批評家は、すでに西洋文化がその盛時を過ぎ、衰亡期に入っていることを予見している。確かに西洋文明は、世界文明の一方の主流としてユダヤ・ギリシャ・ローマ以来の西方文化を総合し、近代において、人類文化の主流となり、世界文明の進歩の上にきわめて重大な貢献をなしたことは何人も認めなければならない。その個人主義的・合理主義的・積極進取的文明は人類の向上の上に大なる寄与をなしたことはいうまでもない。しかし、西洋文明の長所は同時にまたその短所である。サイエンス、テクノロジー、合理的マネージメントは人類の文化の上にいうべからざる偉大な功績を挙げた。しかし、個人主義・闘争主義・優勝劣敗主義・唯物主義・経済偏重主義は、きわまるところ国際平和を不可能ならしめ、民族闘争を不可避ならしめ、戦争技術の発展により人類の生存、地球の存在をすら危うくするに至らしめた。西洋文化が支配するところ真に地上の平和が来たらないであろうことは近代世界史がまさに雄弁に物語っているところである。もし、人類に将来があり、人類文化に発展があるとするならば、西洋文化は幕を閉ちて、来るべき新文化に席を譲らなければならないことは、世界識者の直感するところとなったのである。

フランスの聖者的文明批評家ポール・リシャールの如き、すでに久しき前につきのように西洋文化を糺弾したのだ。

「平等を唱えて偏頗を行い、自由を唱えて諸々の民族を奴隸とし、民主を唱えて暴力の専制を民衆に加へ、国民自決の権利を唱えつつ、もし力弱く備え足らざる国あれば洋の東西と、国の大小とを問わず、これを抑圧するもの、これらの諸国、総じて今、

天の糾弾をうく。」

四 わが国土の地政学的地位

ひるがえって眼をわが国の方に転じよう。

歴史あつてこのかたわが国は東アジア大陸と一衣帯水をへだてて、渺々たる太平洋の西北の一隅に位する一連の群島である。もとより、このわが列島は、地理学的にみると、太平洋の西北、東アジア大陸の沖合にあたり、カムチャツカ、カラフト、千島、日本列島、琉球、台湾、フィリピン、モルツカ、ニューギニア北岸にいたる一大弧形の火山島の一部であることはいうまでもない。今日、われわれの知るかぎりでは、日本列島は世界地図の示すとおり位置、形体、広さをもっているが、大陸漂移説などを唱える学者の見解では、日本列島も、有史前には、今日と全く異なつた位置、形体、広さをもっていたであらうと想像される。少なくとも、わが列島は、かつては、アジア大陸の一部であり、地殻の大変動により大陸より隔離され、オホツク海、日本海、東シナ海を隔てて、大陸と相對するようになつたことは地理学者の承認するところである。とにかく、日本列島が、地理学的に地球上に占める位置、形体、広さなどこそ、実にわが国および民族の自然的・地政学的基盤であつて、永久的に、先天的に、われわれの運命を規定するものである。

地政学的にみてわが国土の根本特質は、それが、太平洋上の「島嶼国」であるということだ。この島国性という点

こそ、実にわが国、わが民族の先天的性格であり、わが国、わが民族の運命と発展の永久的規定であるのである。

わがキリスト教界の大先達であり、天才的予言者とうたわれる内村鑑三は、夙にその名著「地人論」のうちで、島国（海国）についてつぎのように述べた。

渺茫たる海の面これ広濶の代名詞なり、山間の頑民、市街の怯夫、天涯無限蒼浪の上に浮ぶに及んではじめて宇宙の大を悟り、狹隘圧制の憎むべきを知覚す。海を望んでわれらは、はじめて世界の民たるを知る。芙蓉の秀麗なるは太平洋の広漠たるに及ばず、退保と嫉妬は陸の物なり。進取と寛裕は海の産なり。埠頭海に臨む処、これ世界の王国に入るの門ならずや、黄河滔々海に流れてやまず、人のみは陸に填積して窒死すべきか。（内村鑑三「地人論」（岩波文庫）四六頁）

不幸なるかな、わが民族は、この予言者の言に従わなかったのだ。そして二千年間、ほとんど一貫して、この島の中に蟄居して、海に乗り出さなかったのだ。わが民族の今日までの運命を決したのは、実に、この退守性、鎖国性という点にあったのである。

地政学的に島国性 *Insularity* なるものの長短をみると、島国は、外国、他民族よりの侵略に対して、最も安全な国境をもつ長所がある。外部から四面環海の島国に侵入するには、海軍力をもつてしなければならない。海上の護りにして堅固ならば、島国は絶えて外国の征服をうける心配はない。これわが国が、二千年の歴史を通じ、最近の一例を除き、かつて外力の侵入や征服をうけなかった主因であるのだ。わが国の本質を理解する点で、わが国人以上であるフランスの哲人、ポール・リシャルは、日本讃歌「日本の児等に」のうちでかつて、こううたったことは周知の如くである。

ひとり自由を失わざりしアジア唯一の民！

汝こそ自由をアジアに与うべきものなれ

かつて他国に隷属せざりし世界の唯一の民！

一切の世の隷属の民のために起つは汝の任なり

かつて滅びざりし唯一の民！

一切の人類幸福の敵を亡ぼすは汝の使命なり

(ポール・リシャール原著、大川周明訳「告日本国」参照)

実に海こそは日本独立の防護者である。

しかし太平洋は一面、阻、隔、力として作用すると同時に、他面、誘、引、力として作用する。不幸にして、わが民族には太平洋は主として阻、隔、力として働らきわが民族を退守鎖国の民たらしめたのだ。古来わが歴史を一貫するものは、この退嬰性と鎖国性であるのだ。わが民族は大陸方面より来る侵略の危険に対処する場合の外は、絶えて大陸に対し、また大洋に対して積極的に乗出さなかつたのだ。およそ世界の文明民族で、わが民族ほど、この退守性と鎖国性が骨身にしみついて抜き難いものはない。これがわが国史の特色たる非膨脹性、非戦性、避戦性を解明する鍵であるのだ。だがわが国は、カール・ハウスホーファーの指摘するように、単なる島国ではなくして、「半大陸性」をも併せ

もっているのである。わが国は、古来、カムチャツカ半島、カラフト島、朝鮮半島という三つの陸橋をもつて、大陸と連なっている。とくに、朝鮮半島は対島、杳岐の飛石伝いに、大陸からわが国へ架せられた一大陸橋である。そして朝鮮半島の背後地には古来有力な多くの種族が興亡したために、この一大陸橋は古来大陸からわが国に侵入する第一の通路となったことは国史の明証するとおりである。したがってわが国は、大陸性の特性をも半ば固有するものなのである。

大陸に国をなすものは、島国とちがい、国境の安全性を保障されず、遠近の異種族との活発な生存闘争にさらされるのである。この故にわが国は古来、朝鮮半島およびその背後地たる諸地域に興亡した幾多の諸種族と、直接間接の接触、闘争をなさざるをえなかったのだ。古来のわが国の外交が大陸外交であったのはこの理由によるのである。わが国への文化の流入は、主として朝鮮半島を経由したもので、シナ文化もインド文化も、西洋文化も、古くは、みなこの経路より来ったのである。わが国が「半大陸性」をもつことが、わが国史に、きわめて重大な効果を及ぼしたことは国史の物語るところである。

海の誘引力の面について、内村師は前掲の書にこう雄弁に語っている。

海の歴史は膨脹の歴史なり。アジア西端の海岸一小片に抛りしフェニシヤ人は、海に打勝ちしが故に地中海と北海と、バルチック海沿岸の諸邦に勝てり。海に抛りしが故にアテネの小邦はギリシヤ聯邦に敵対しえたり。海に浮びしが故にヴェニスの一市は歐洲諸大国に比敵するの富と権とを握れり。海に出でしが故にオランダの小なるもなほ歐洲第一等に位するをえ、海を利用せしが故に英國は、今や世界六分の一の持主なり。海に抛りし間はスペインは今日の軟弱国ならざりし。

海に抛らざりしが故にインド、シナの文明は停止の文明なりし。海を怖れし日本は永く東隅の一隠居なりし。……

(内村鑑三「地人論」(岩波文庫本) 五〇頁)

有史このかた日本は南面に天涯無限の太平洋に臨んでいた。しかもわが民族は海を怖れて島内に蟄居し、対外的には、非膨脹・非戦・避戦を伝統とし、対内的には源平的・内争的分争を事としたのだ。そして結果は、二千年間、この大和島根にとちこもることに終ったのだ。これわが国史の一大弱点でなくて何であらうか。まことに海を怖れた日本は永く「東隅の一隠居民族」であつたのだ。

五 わが民族のジェニーとエネルギー

わが民族の特質はイギリスの天才的政治学者ロバート・シーリーが夙に道破したように「諸文明の実験主義者」たる点にある。わが国は、太平洋の孤島であつたがために、その固有する民族文化は勢い未開幼稚たるを免れなかった。そこで古来、わが先祖は大陸方面からつぎつぎに流入する他国の文化を虚心に、喜んで輸入したのである。外来文化は概してわが固有文化に比して高等な・進歩したものであつた。舶来はすなわち上等であつた。わが祖先は、その天賦のジェニーとエネルギーとをもつて、これらの外来文化を咀嚼し、淘汰し、摂取し、同化したのである。特にこの模倣と淘汰の点においてわが民族は世界にすぐれた天分を發揮したのである。そして長年の学習を経て、次第に外来文化を風土化し、多少の程度で、これを日本文化化することをえたのである。

六 日本文化史の大観

日本文化史を大観すると、日本文化と外国文化との交流には大体六つの時期があったことを知るのである。

一、神功皇后の三韓征伐から応神天皇の時代に始まった朝鮮との公式接触によるシナ文物の間接輸入、その後数代間シナ諸侯との非公式接触による直接輸入

二、欽明天皇の御代、百済から仏教が伝えられ、ついで隋唐との公式交通による大陸文化の直接輸入

三、鎌倉・室町時代、宋、元、明との接触によるシナ文化の輸入

四、織豊時代、ポルトガル、スペイン人との接触による南蛮文化の輸入

五、幕末維新時代、欧米文化の盛んに輸入摂取された時期

六、終戦・占領の時代、アメリカの軍事占領軍事統治の下、アメリカ的文化革命を強制され、アメリカ化の急激に行なわれた時期

日本文化史を通観して、日本文化と外国文化との交流・接触の態様をみるに、右の第六期をのぞき、一般にはつぎのような特色のあることを知るのである。

一、常に自国の政治的独立を維持しながら任意に自主的に外国文化を採入れたこと

二、日本文化開発の根本源動力は、本来日本人が先天的に固有する独特のジェニーとエネルギーであること
三、日本人の氣質が文化に関するかぎり閉鎖的でなく、開放的であって、外来文化を喜んで迎えたこと
四、日本文化の発達程度が他国より遅れていることを直感し、外国文化を進んで摂取し咀嚼し、營養とすることに熱心であったこと

五、外国文化を任意的・自主的・主体的に摂取するが故に、わが民族性、わが国柄と相容れないような外国文化はつとめて排斥し、採長補短の効果を挙ぐるに努めたこと

六、わが国は、島国であり、鎖国的であつたため、外国文化がふんだんにわが国に流入することはなく、十分咀嚼吸収を可能ならしめる程度に、距離と間隔がおかれたこと

七、日本文化が主体的に外国文化を摂取するから、日本文化が主体として、外国文化を自己のうちに包摂し、適当な位置をこれに与えるのである。あだかもギリシャ神話で、ディオニソスがオリュンポスのパンテオンのうちに編入されて、アポロと握手するがようにである

七 日本文化の特色——短所と長所

このような態様で、日本文化史の六期を通じて、わが国は、せつせと外国文化を採入れた結果、結局、日本文化は複合的・折衷的・混合的のものとならざるをえなかったのである。これは日本文化の幼稚性と後進性のいたすところ

で、やむをえないところであつたのである。

わが民族の固有文化は、外来文化に比して概して、幼稚なものであつたから、よしこれを主体的に取入れたとしても、これを十分に摂取、同化することはできなかった。シナの儒教やインドの仏教や西洋のキリスト教が流入してくると、在来のが神道は、これを十分に咀嚼、摂取することはできなかった。これらを日本的に習合して、わが民族の宗教心を満足せしめた結果、神儒習合、神仏習合、神儒仏習合、神基習合、神儒仏基習合、などの複合的なものを生ぜしめることとなつたのである。本来、宗教ないし信仰は、人間を最深所で、また全体的にゆり動かす靈妙な力をもっているものであるから、宗教が純粹でなく、複合的・複数的・折衷的であることは一国文化の根本的な欠陥である。神道はわが民族固有の民族信仰であるが、それがユダヤ教や、バラモン教のような強固な民族宗教として留まるをえなかつたのである。外来宗教はそれぞれ多少の程度で、わが固有の信仰と習合したから、それらも、本来の純粋性を失ひ、人類教ないし世界教たる性質を損ずるようになったことは不可避となつたのである。

しかし他の反面で、わが民族は、その固有する独特の日本人的靈性をもつて、外来宗教を摂取し、寛容したから、ヨーロッパその他におけるような宗教闘争や、宗教戦争の弊に陥ることを免がれたのである。あのポール・リシャールは、これを讚美して、つぎのようにうたつたことは広く人の知るとおりである。

流血の跡なき宗教をもてる唯一の民、一切の神々を統一して更に神聖なる真理を發揮するは汝なるべし

(ポール・リシャール前掲書)

またわが神道を外国に伝道するに熱心であつた藤沢親雄氏は、「神国日本の使命」のうちで、つぎのように喝破し

た。

「わが神ながらの大道こそは、仏教、キリスト教その他万教が帰一すべき「宗教中の宗教」であって、これこそ真の意味における唯一絶対の普遍的全人類的宗教である。」

またわが国に長く留学して日本文学を専攻し、わが文化を深く理解せるハーバード大学教授V・H・ヴィリエルモ博士も、日本人の宗教的使命は仏教とキリスト教との調和であるとなし、つぎのように論じた。

「結局日本精神文明の行くべき方向は一つしかない。それは宗教である。宗教以外に精神文明はありえない。いくら優れた物質文明があっても、そこに生きた宗教がなければその物質文明は空っぽで、ムダで、無意義だ。ただの物質文明だけではほんとうの文明ではない。だから日本人はこれから宗教の意義を見出さなければならない。」

日本の宗教状態は全く困った状態である。実に混沌たる状態である。……しかしその状態の中には非常に良い点がある。それは多種多様の宗教の平和共存である。幸に日本人は西洋の恥になった宗教戦争を免れた。しかし日本人は宗教を整理する要があると思う。

日本人のこれからの最も必要な仕事は、まさに仏教とキリスト教との思想的な衝突から出て来る。もうすでにその仕事は西田博士や田辺博士によって見事に始められている。つまり仏教の優れた哲学をもって、キリスト教の真理を日本人によくわかるように追究することである。

日本の精神文明のゆくべき方向は仏教とキリスト教との調和への方向である。その調和は一日の仕事ではない。しかしその方向にゆきさえすればいつか到達する。」

(ヴィリエルモ博士「岐路に立つ日本文明」東京新聞一九五七・八・二九掲載)

道徳は本来、信仰と直結し、信仰の基礎の上に立つべきものである。日本人の固有道徳は、神道と直結し、神道の上に立っていた。儒教や仏教の輸入により、その影響をうけて、わが道徳も変形したのは当然である。わが国特有の封建制度の下に、武士道という道徳が発達したが、もとより仏教や儒教の影響を免れない。日本人の信仰が習合的であるがために、われらの道徳も、また複合的となり、純粹・真実・堅固なるをえなかったのは不可避であつたのである。

わが民族は、固有な文字をもたず、したがって固有の学問はなかつた。わが学問は二千年間、ほとんど全くシナの影響のもとにあつた。織豊時代、南蛮文化が流入し、幕末開国以後さかんに欧米・文物を輸入し、学問も主として西洋的となつたことはいふまでもない。日本人はただ外国の学問を輸入し、模放し、受売りするに急であつて、日本人独特のジェニーを働らかして、世界の学問界に一旗幟をひるがえすことはほとんど全く行なわれなかつたのである。学問的にはわが国はただ外国から負債するだけで返済することはほとんど全くなかつたといつて過言でない有様なのである。

八 文化の運行は東より西へ

天才的なフランスの史家ジュール・ミシュレーは百四十年前、「普遍史序論」(Jules Michelet, Introduction à l'histoire universelle, 1831)をかつて人類文明の運行は太陽の運行の経路と一致すると道破した。世界文化史を大観するに、太古アジアの東端シナに創まった人類文明はインドに起った宗教文化とともに人類文化の発祥となり、東洋文化の淵藪を成した。人類文化は西進して、メソポタミヤ、エジプト、西アジア海岸に咲き、ヨーロッパで、燦然たる西洋文化の果を結んだ。これは大西洋をわたってアメリカの野に移し植えられさらに一段と盛りを誇ったのだ。「地中海文化」と呼ばれたものが、発展して「大西洋文化」となったのである。今日までの人類文化は大西洋文化のうちに綜合されて、これまでの發達の頂点を成していることはまさに、クーデンホーフ・カレルギーの喝破したとおりであるのだ。

だが、人類文化の運行は大西洋に留まる筈はない。アメリカ大陸を過ぎて太平洋に移るべきは自然の径路であらねばならない。今やまさにその時機は到ったとみねばならない。ここにおいて太平洋上に二千年間、待機していた日本国と大和民族の「時」はまさに到らんとしているのだ。

九 わが民族の文化的使命

幕末維新このかたわが国の志士や先覚者のうちにはわが民族のこの世界的使命を予感し、予言したものは一二にして止まらないのである。佐藤信淵、佐久間象山、横井小楠、吉田松陰らを始め、福沢諭吉、大隈重信、内村鑑三、徳

富蘇峰など、みなしかりである。内村鑑三は前に挙げた「地人論」のうちでアジア、ヨーロッパ、アメリカの地理と文明を論じ、その特質を指摘して、つぎのように結んでいる。

「今世界三大文明の特質を挙げれば左の如し。

歐羅巴文明——政界、教界における分離、

支那文明——政界における綜合

印度文明——教界における綜合

三者混合相同化して始めて完全なる文明あり。一は他の二者に頼らざればその欠を補ふ能はず。人類の希望は三者の調和一致にあり。」(内村鑑三「前掲書」一五〇—一五一頁)

さらに、この書は「日本の地理とその天職」の章の結論としてつぎのようにのべている。

「日本をして米、亜の文明に接せしめしものは、勿論その地理学上の位置に依れり、これをしてアジア的の統一に堪えしめしものはその軸脉の南北して一國の統御を易からしめしが故なり。而して西洋主義の輸入に会して直にこれに應ずるに至らしめしものは、東西の横断脉ありて、統一の下にありてすでに自治割拠の制に馴致せしが故なり。東洋的の君主主義もわれに施し得べし、西洋的自由制度もわれは施行し得べし。われの制度は西洋に則れり。西隣もし西洋を学ばんと欲するか、必ずわれよりこれを学ばん、東隣もし東洋の長を取らんとするか、必ずわれにおいてこれを認めん。両洋われにおいて合す。パミール高原の東西において正反対の方向にむかひ分離流出せし両文明は、太平洋中において相会し、二者の配合によって胚胎せし新文明は、われより出でて再び東西両洋に普ねからんとす。」

今より七十六年前に、わが内村翁はすでに右のように予言しているのである。

またポール・リシャル翁は、前掲の「日本国に告ぐ」のうちで、つぎのようにうたっている。

「新らしき科学と旧き知慧と、ヨーロッパの思想とアジアの精神とを自己の裏に統一せる唯一の民！」

わが民族の世界史的使命は東西両文明の綜合・止揚にあるは衆論の一致するところである。

つらつら思うに、わが民族の文化には、前に掲げたような欠点、短所のあることはこれを謙虚に認めねばならない。だがヴィリエルモ博士が、わが宗教について長短を指摘したように、わが文化一般にも、また大きな長所のあることを公平に認識せねばならない。

本来、文化の創造ということは個人のジェニーにまつものである。個人のジェニーは、民族のジェニーに負うものである。したがって文化の創造は、本来個々民族のジェニーに因るのである。民族文化を離れて、世界文化はありえないのである。一国文化がその優秀性・感化力を世界的に發揮してここに始めて世界文化が起ることは、世界文明史の明証するところであるといつて誤りではなからう。

したがって日本文化は、結局、日本民族が本来固有する民族的ジェニーによって創造・發展された文化である。あだかもユダヤ文化が、ユダヤ民族のジェニーに淵源し、インド文化がインド民族のジェニーに起源し、ギリシャ、ローマの文化が、それぞれギリシャ民族、ローマ民族のジェニーに依拠したものであると同然である。日本人のジェニーを離れて、日本文化のある筈はないのである。

われわれ日本人は、太平洋の西北隅に国を成している關係上、まず、シナに起ったシナ文明を輸入し、ついでイン

ドに起ったインド文明を摂取した。われわれは、二千年間、東洋文明をわがものにするために孜々として努力錬磨したのである。われわれの祖先は、その優れた日本人的靈性・知性・情性・意性をはたらかして、東洋の宗教・道徳・学問・芸術を学習し、これを風土化したのである。織豊時代から、特に幕末維新時代から、わが民族は渴せる者のように、西洋文化を吸飲して、そのサイエンス・テクノロジー・マネージメントを学習し、自己のものとするために精励したのである。またわれらは古今東西の典籍・文物を蒐集し、貯蔵する性癖をもち、わが国を世界の図書館、世界の博物館たらしめるにいたったのである。

一〇 わが民族活動の三方面

Ⅱ 太平洋方面が天与の主方面

有史このかたわが大和島根は太平洋上の孤島である。わが国土は先天的に發展すべき三つの方面をもつのである。

第一、大陸方面 第二、太平洋方面 第三、世界方面 これである。

わが国史を按ずるに、今日まで、わが民族が主として交渉をもち、發展を試みたのは、大陸方面であった。大陸方面には、カムチャツカ方面、カラフト方面、朝鮮方面の三つの関門があること東亜地政学の示すとおりである。しかしわが民族が交渉をもち、活動を試みたのは、ほとんど専ら朝鮮半島とそのヒンターランドであったことはわが国際政治史の明徴するところである。わが対外活動は二千年を通じ、鮮・満・支の方面に行なわれた大陸外交・大陸政策であったのだ。けだしわが国への重大な侵略や、圧迫はつねにこの方面から来たからである。

世界方面との交渉は、ヨーロッパの勢力の東漸とともに近代当初から僅かに起ったが、わが民族の伝統的な退守性・避戦性・鎖国性のために、幕末開国までほとんど全く無為の状態にあったことはこれ国史の物語るところである。わが国に先天的に与えられた本来の活動方面は、太平洋方面であつた筈である。有史以来、わが島根は太平洋上に浮かんでおり、茫漠たる太平洋はわれらの眼前に展開されていたのだ。太平洋上の無数の島々は波濤の彼方に点々していたのだ。両アメリカ大陸は遙か東南のかなた、海を隔てて横たわつていたのだ。しかもわれらの祖先は戦国時代に特発的に濠亜地中海に活躍したほか、絶えてこの方面に乗出さなかつたのだ。これもとよりわが民族の伝統たる退守・非戦・鎖国・蟄居の陋習に基づくこと、もとよりいうまでもないところであるのだ。

近代五百年間にヨーロッパの諸民族は世界的に飛躍し、海外の世界を忽ち「グレート・ユーロップ」と化し、ヨーロッパ勢力・ヨーロッパ民族・ヨーロッパ文化の植民地となし終つた。かの関ヶ原の戦われた慶長五年（一六〇〇年）には、アングロ・サクソン人はほとんど一人も海外の天地にはいなかったのだ。その後僅かに三百五十年、今日、全世界はアングロ・サクソン人の支配下に立っているではないか。太平洋は事実上「アメリカの湖」と化し、その洋上の島々、両米大陸、濠亜地中海の島々はほとんど挙げて、その制圧の下にあるではないか。彼と我を比較して実に天地雲泥の差も畜ならぬ有様ではないか。

一一 世界は大西洋民主共同体とアジア共産共同体とに両分

第二次大戦後四半世紀の今日の世界は大観すると、アングロ・サクソンの支配する「自由大西洋共同体」と、ソ連の支配する「共産アジア共同体」とに両分されている。いわゆる第三地帯、第三世界を云々する者もあるが、畢竟それらは独立自存の地域ではなく、早晚、右の二大勢力の何れかに帰属すべき運命にあるのである。

今にして想えば、今より四十年前、アメリカの天才的文明・政治評論家ウォーター・リッブマンが、アトランティック・コミュニティーのアイディアを打出したことは驚くべき予言であつた。かれは西欧的自由デモクラシーの思想、議会デモクラシーの制度を採用せる大西洋をさしはさむ兩岸の諸地域・諸国・諸民族は一つの運命共同体を形成することを闡明し、ヨーロッパ的独裁主義、アジア的専制主義の世界と対立すべきことを予言したのである。今日、自由民主主義と、自由議会主義を奉ずるアングロサクソンの勢力は実にこのアトランティック・コミュニティーの基盤の上に築かれているのだ。そしてマルクス・レーニン主義、毛沢東主義を奉ずるソ連、中共の権力は実に、ロシアの専制主義、シナの専制主義を性格とするもので、共産アジア共同体の上に磐居しているものなのである。

この自由民主主義、いわゆる白色世界帝国主義と、マルクスレーニン主義、いわゆる赤色世界帝国主義とはともに、全世界を独占し、普遍的権力を獲得しようとするものであつて、この両者が相打ち、相闘っているのが現下の世界なのだ。この両者は核拡散防止条約を世界各国に強制し、兩頭的に世界覇権を占有し、事実上の世界政府を形成している。人類の存亡と、人類文化の盛衰の鍵を握る圧倒的原子兵器の独占が、この両超大国の手にあるかぎり、人類の運命は、かれらの手中にあるわけだ。

だが、この両超大国の本質は、ともに、世界帝国の建設をめざす普遍的帝国主義であるから、かれらは一面提携、

一面鬭争の關係にあるはいうをまたない。天に二日なく地に二王あるを許さないかぎり、早晚、この兩大權力の間に、アーマゲドンの戦わるべきことは必至であらねばならない。西欧的文明・西欧的帝國主義の性格をもつかぎり、この両者が究竟「平和的共存」を維持しえざるべきは当然であらねばならない。

第二〇世紀の世界は、一面、世界史發展の頂点を画すると同時に、他面、その轉換期を成すものである。近代の世界はまさにこの世紀の終りとともに幕を閉ち、第二一世紀の開始とともに、世界史上の新天地が展開すべき順序となっている。しからば、この新世界、新時代の中心舞台はどこであろうか。その文化的、政治的リーダーはたして誰であるだろうか。

わが国、わが民族は二千年間、太平洋上の孤島にあって、ひたすらその「時」の到るのを待っていたのだ。第二一世紀の到来とともに、ようやく、開闢以來、懷抱していたわが民族の天与の世界史的使命を果たすべき「時機」に到着したのだ。わが民族の固有するジェニーとエネルギーを遺憾なく發揮して、人類の發展、人類文化の進歩に貢献すべき時期に際会したのだ。

一二 太平洋共同体、太平洋文明の創設

わが民族の天与の活動舞台は太平洋方面であり、「太平洋共同体」である。

太平洋共同体とは何であろうか。

太平洋共同体の地的基盤は「太平洋地域」である。

太平洋は地球上における最大の大洋である。その面積は地球全面積の三五％にあたり、地球上の海洋面積の五三％を占めている。それは地球全陸地面積よりも広いのである。全大陸面積にいたっては太平洋の二〇分の一にも及ばない。パナマからマラヤにいたる東西の距離は約二一、五〇〇陸哩である。ベーリング海峡から南極圏にいたる長さは約九、三〇〇陸哩である。太平洋面積の約八％は、陸の障壁で、主たる海洋から、部分的に隔離された比較的小さい内海、湾から成っている。ベーリング海、オホツク海、日本海、黄海、東シナ海、南シナ海、スーラ海、セレベス海、ジャヴァ海、フロレス海、バンダ海、アラフラ海、シャム湾、カリフォルニア湾の如きである。太平洋の北方と西方の境は、アレウト列島から、千島列島、日本列島、琉球、フィリピン群島、モルッカ群島、ニューギニアの北岸にいたる偉大な弧形によって区切られている。

日本やシナの航海者は西紀一〇〇〇年頃、アジアの沿岸地方、西部群島に沿って航したが、植民や土着をなさなかつた。一三〇〇年頃までにニュージーランドからハワイ、マルケサス、イースター島にいたる中部太平洋の主な島々は、ミクロネシア人、ポリネシア人によって植民された。

欧米人による太平洋の探検は二期に分れる。第一期は海岸線と島嶼の発見の時期であり、第二期は海面下の科学的研究の時期である。

太平洋地域は、太平洋上に浮ぶすべての大小の島々、並びに太平洋に臨む大陸の太平洋側面の土地である。いわゆる濠亜地中海の島々もこの地域に含まれる。

太平洋地域に定住する部族・種族・民族は多種多様であって、簡単に列挙することはできない。

今日、太平洋地域に国を成す主なものは、日本、朝鮮、中国、ヴェトナム、タイ、フィリピン、インドネシア、オーストラリア、ニュージーランド、カナダ、合衆国、メキシコ、中央アメリカ諸国、南アメリカ諸国である。

これらの諸国は、それぞれその国柄において、大なる差異をもっていることはいうまでもない。その言語・宗教・政治法制・経済財政・歴史伝統・風俗習慣において区々である。その間に同質性ないし類似性を求めることは困難であるは自然である。

しかしこれを今日の世界の現勢から大観すると、太平洋地域は惣じてアングロサクソン超帝国の勢力下にあり、大なり小なり、その支配・影響の下にあることは既述せるとおりである。この点で、ロシア専制主義・シナ専制主義の支配下にある共産アジア共同体に含まれる諸国・諸民族と対照されるものであることも、また前述せるとおりである。今日の太平洋地域はこのように太西洋文明の支配の下にある。しかし明日の太平洋地域は、太古太平洋文化圏のうちに「太平洋文明」の光被する世界とならねばならない。太平洋共同体の文化的基盤はまず「太平洋文明」であらねばならない。

しからば、従前の「東洋文明」「西洋文明」に対して、第三の「太平洋文明」とははたしてどういうものであるか。太平洋文明とは、人類史上、すでにその歴史的役割を演了した東洋文明、西洋文明にかわって、新たに人類に光被すべき第三文明に外ならない。東洋文明と西洋文明を綜合し止揚して創造さるべき、一段と高度の新文明に外ならぬのだ。

クーデンホーク・カレルギも予言するようにこの新文明・第三文明の創造者たる世界史的使命を担って地上に生存する民族こそ、実にわが大和民族であらねばならないのだ。

この日本の天職こそは、八十年前、予言者内村鑑三師も雄弁に喝破したところではないか。

「日本国の天職いかん、地理学は答へて曰く、彼女は東西両洋の媒介者なりと。いふなかれ何ぞ簡短の甚しきやと。これ一大国民なるに恥づべからざる天職なればなり。これギリシヤ国の天職たりしなり。これ英国の天職にして彼女の強大なるは、彼女がよくその天職を尽せしが故なり。媒介者の位置……「和平を求むるものは福なり、その人は神の子と称へらるべければなり。」

地理の指定にかかるわが国の天職は、大和民族二千年間の歴史が不覚の中に徐々として尽しつゝありし天職ならずや。

(内村鑑三「前掲書」一六七―八頁)

欧米の大西洋文明が、人類史上偉大な貢献をなしたことをわれらは謙虚に承認するものである。しかし、徹頭徹尾、個人主義・非寛容主義・侵略主義の上に立つ、この文明は所詮「悪魔の文明」である。論より証拠、ヨーロッパ四千年の歴史は一貫して帝国主義の歴史であった。世界国際政治史はこれを明徴して余りあるのだ。欧米流の個人主義・非寛容主義・侵略主義の行なわれる間、地上に真の平和の来らざるべきは、世界の識者が胸裡に認識しているところなのだ。

今日、真実の平和主義者として、非戦主義者として、非暴力主義者として全世界から崇敬されているインドの聖雄、マハトマ・ガンディは叫んだではないか。

「私は一切をインドに負うているからインドと結婚したのだ。インドは人類史上果たすべき一つの神聖なる使命を

もっているという絶対的信念を自分は懐抱している。インドには固有の信仰があり、道徳があり、伝統があり、文化がある。インドは盲目的に欧米を模倣してはならない。(抄訳)

来るべき第三文明は、従前の東・西文明の成果と長所を包容しつつ、その短所を除き、一段とレベルの高い新人類の文明であらねばならない。それは「悪魔の文明」ではなく、「聖人の文明」であらねばならない。それは単なる物質的・技術的・経済的文明ではなく、精神的・教化的・倫理的・連帶的・統合的文明であらねばならないのだ。

一三 結 言

かの牧師的大統領として、国際連盟の創立者となったウッドロー・ウィルソンは、その白鳥の歌において、人類の文明は精神的に救済されないかぎり、断じて物質的に生き延びることはできないと遺言した。神を信じ祖国を愛し、人類を思うすべての人にとってここに最後のチャレンジがあるのだ。

人類は、前代未聞の大革命期である第二〇世紀を経て、まさに新天新地の第二一世紀を迎えんとしている。この新世界を指導すべき人類文明は、平和的・教化的・倫理的・連帶的・統一的な第三文明であるべきだ。第三文明を創造する天職を負う日本国・日本民族の責任こそ実に至重至大であるのだ。われらは偉大なる信念と、絶大なる勇氣と不撓のエネルギーをもって、この天職の遂行に邁進せなければならない。(四五・九・二〇稿)